

〔原 著〕

未就学児のいる親用ソーシャルサポート認知スケール (Social Support Perception Scale for Parents Rearing Preschoolers: SSPS-P) の開発と その有効性の検討

平谷 優子¹⁾ 法橋 尚宏¹⁾

要 旨

ソーシャルサポートは育児で重要な役割を担うが、多様化した現代家族のソーシャルサポートを評価する尺度は少ない。本研究の目的は、育児支援が必要である就学前のこどもがいる親を対象として、“未就学児のいる親用ソーシャルサポート認知スケール” (Social Support Perception Scale for Parents Rearing Preschoolers: SSPS-P) を開発し、その有効性を検討することである。

親からの回答から項目精選を行い、SSPS-Pを作成した。これは、4下位尺度、28項目で構成される自記式質問紙であり、表面的妥当性は研究者4名で確認した。このSSPS-Pを親に対して実施した結果、上位-下位分析では全項目において上位群と下位群の得点に有意差が認められた。SSPS-Pと丸らのソーシャルサポートスケールとの対応する項目間において、Spearmanの順位相関係数は0.41以上であり、併存妥当性が支持された。Cronbachの α 係数は0.91であり、内部整合信頼性は高かった。2週間の間隔をおいたSpearmanの順位相関係数は0.77であり、反復信頼性は確保された。

以上のように、SSPS-Pは、就学前のこどもがいる親のソーシャルサポートを評価する妥当性と信頼性を備えた尺度である。SSPS-Pが、こどもがいる家族に対する研究やインターベンションに寄与することを期待したい。

キーワード：ソーシャルサポート、SSPS-P、尺度開発、子育て支援、家族支援

1. はじめに

家族の成長・発達区分において、乳幼児の養育に多くの時間を費やす時期は、こどもの急激な成長・発達に伴い、家事や育児、仕事などの役割の調整、家族や親族との関係の再構築が必要で、親にかかる負担が過剰になりやすい¹⁾²⁾。したがって、このような家族への育児支援が必要である。ソーシャルサポートやそのネットワークは親の健康状態や精神状態に影響を与え、間接的に、こどもの健康に影響を及ぼすことが指摘されている³⁾。たとえば、ソー

シャルサポートは、親のストレス⁴⁾や育児負担感、育児不安を軽減するが⁵⁾、これは、乳幼児虐待予防の観点からも重要である⁶⁾。育児支援の専門家には、ソーシャルサポートの充実を図り、ネットワークスキルを高めるように支援することが求められている⁶⁾、子育てをしているさまざまな形態の家族がどのようなひとびとからどのような育児支援を認知しているかソーシャルサポートの特徴を理解する必要がある。

近年、日本では、核家族化、少子化、離婚の増加、離婚によるひとり親家族の増加などに伴い、家族が小規模化し、家族機能が低下して、子育てをする親の負担が増大している⁷⁾。また、地域社会にお

1) 神戸大学大学院保健学研究科家族看護学分野 (家族支援 CNS コース)

ける連帯が希薄になり、育児が孤独で不安なものへと変化している⁸⁾。このような状況のなか、就学前のこどもを養育している家族にとって、保育所・幼稚園、子育てサークル、ベビーシッターなどの「地域社会の資源」からのソーシャルサポートは、育児を行ううえでこれまで以上に重要な役割を担っている⁸⁾。このような育児環境や社会構造の変化に伴い、子育て中の現代家族を支えるサポーターが過去と現代とでは異なる可能性が考えられる。たとえば、近年増加しているひとり親家族の重要なサポーターは身内ではなく友人である場合や、出産時に里帰りをしない家族の割合も多い⁹⁾。

しかし、多様化した現代家族のソーシャルサポートを把握できる、信頼性と妥当性が検証された尺度¹⁰⁾⁻¹³⁾は少ない。また、サポートは実行されたサポートと認知されたサポート（利用可能性）の2種類に分けられるが、実行されたサポートはサポートを受けた経験がなければ測定できない。一方で、認知されたサポートは、実行されたサポートより良い適応や健康状態と密接に関連していることが明らかにされている¹⁴⁾¹⁵⁾。

そこで、特に育児支援が必要な就学前のこどもを養育している親のソーシャルサポートの認知を把握するための新しい尺度である「未就学児のいる親用ソーシャルサポート認知スケール（Social Support Perception Scale for Parents Rearing Preschoolers: SSPS-P）」を開発し、信頼性と妥当性を検討することを本研究の目的とした。

II. 研究方法

1. 対象者

就学前のこどもがいて、その養育に家族の力を注ぎ、社会とのつながりが変化する時期にある¹⁶⁾親（父親と母親）を対象とした。家族の成長・発達区分を統一するために、第一子の年齢が高校卒業（年齢）までの家族に限定した。

2. SSPS-Pの作成

1) ソーシャルサポートの操作的定義

House¹⁷⁾のソーシャルサポートの分類に従い、ソーシャルサポートを情緒的サポート、手段的サポート、情動的サポート、評価的サポートの4種類に分類し、これらに対する認知を測定することとした。

本研究では、ソーシャルサポートとは、情緒的サポート、手段的サポート、情動的サポート、評価的サポートのうち、少なくとも1つ以上を含む個人間の相互作用が支援的な性質をもつと本人によって認められたものと操作的に定義する。情緒的サポートは、一緒にいて楽しい、わかり合える、信頼し合える、安心できるなどの感情的な手助けとする。手段的サポートは、家事・育児を手伝ってくれる、お金や物を貸してくれるなどの実際的な手助けとする。情動的サポートは、自分にとって必要な情報を与えてくれるなどの情報提供的な手助けとする。評価的サポートは、自分の意見に賛成してくれる、自分を高くしてくれるなどの評価的な手助けとする。これらは、尺度の教示文で説明した（表1）。

2) サポーターの項目精選

①方法

親がサポート源としてどのようなサポーターを認知しているのかを明らかにするために、「あなたにとって支えになるひと」を20人まで自由に列挙してもらう形式の自記式質問紙を自作した。コンビニエンスサンプルとして2保育所に調査を依頼し、保育所内で倫理的配慮などを検討してもらい研究協力への同意を得た。そしてここに通所しているこどもをもつ父母を対象とした。家族数で見ると、A保育所は72家族、B保育所は105家族であり、合計177家族であった。

調査方法は留め置き法とし、保育士を通して質問紙一式（調査への依頼状、家族のサポーターを把握するために作成した自記式質問紙・回答者の基本属性を把握するために作成した自記式質問紙を1組の冊子としてまとめたもの〈父親用と母親用の2冊〉、

表1. 未就学児のいる親用ソーシャルサポート認知スケール (SSPS-P) の内容

以下の1から7にあげたひとからサポートを必要とするとき、どのような支援をどの程度受けることができますか。1を「ほとんどない」、5を「たくさんある」として、現在あなたが感じている程度に最も近い数字に○をしてください（あまり考え込まずにあなたご自身の思いのままにお答えください）。4種類のサポートの内容は、下記のとおりです。

情緒的サポート：一緒にいて楽しい、わかり合える、信頼し合える、安心できるなどの感情的な手助け

手段的サポート：家事・育児を手伝ってくれる、お金や物を貸してくれるなどの実際的な手助け

情報のサポート：私にとって必要な情報を与えてくれるなどの情報提供的な手助け

評価的サポート：私の意見に賛成してくれる、私を高くかってくれるなどの評価的な手助け

	存在の有無	情緒的サポート	手段的サポート	情報のサポート	評価的サポート
1. 配偶者（婚姻関係は問わない）	いる・いない	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5
2. 身内（配偶者は含まない）	いる・いない	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5
3. 友人・知人	いる・いない	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5
4. 近所のひと	いる・いない	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5
5. 仕事仲間	いる・いない	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5
6. 保育園や学校の先生	いる・いない	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5
7. 医療関係者（かかりつけ医など）	いる・いない	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5
その他に支えになるひと	いる・いない	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5

→ その他に支えになるひとがいる場合は、どのようなひとが支えになっているかを具体的に下に記入してください。複数回答可能です。

薄謝、返信用封筒）を対象者に配布、自宅で記入した後、回収した。対象者には本研究の趣旨と内容、研究への参加・協力は個人の自由意思に基づくものであり、研究に参加しない場合や、参加の同意が得られた後に同意を撤回したり、回答を拒否した場合でも不利益を受けることは一切ないこと、希望により詳細な資料を見ることが可能であること、匿名性及び安全性が保障されることを依頼状を通じて説明し、参加の意思のある場合のみ質問紙を回答・返却してもらった。質問紙一式は配布用の封筒に入れて、2007年4月10日に配布し、同年4月17日までに回収した。

②結果

A保育所の36家族65名（父親29名、母親36名）、B保育所の61家族113名（父親53名、母親60名）から回答があった。合計で97家族178名から回答があり、家族数でみた回収率は54.8%であった。全項目無回答の場合と第一子が高校卒業（年齢）以上の場合は、解析から除外した。

列挙されたサポーターは、類似性と差異性に着目

して内容を分類し、カテゴリー化を行った。分析の結果、サポーターとして「配偶者」「身内（配偶者は含まない）」「友人・知人」「近所のひと」「仕事仲間」「保育士・教員」「医療関係者」の7カテゴリーと分類が不可能かつ極少数意見である「その他」（元夫、恋人、芸能人などが記載されていた）が抽出された。なお、分析は2名の家族看護学・小児看護学の研究者でカテゴリーの合意が得られるまで行い、分析結果の真実性¹⁸⁾を確保した。

3) SSPS-Pの構成と表面的妥当性の検討

SSPS-Pは、下位尺度である情緒的サポート、手段的サポート、情報のサポート、評価的サポートの4種類のサポートに関して、7種類のサポーターから「どの程度サポートを受けることが可能と思うか」というソーシャルサポートの認知を評価する尺度として、28項目の回答選択肢型質問で構成した（表1）。なお、「保育士・教員」は回答者が理解しやすいように、SSPS-Pには「保育園や学校の先生」と表記した。これを家族看護学・小児看護学の研究者4名により質問内容を検討し、質問の意図がわか

りにくい不適切な表現やソーシャルサポートの定義などの修正を繰り返し行った。再度検討したところ、質問内容に不適切な表現は認められず、表面的妥当性を確認できた。

4) SSPS-Pの評価方法

サポートの認知の程度を1（ほとんどない）から5（たくさんある）までのリッカート・スケールで回答してもらい、それぞれ1点から5点として得点化する。ソーシャルサポートの得点は高いほどサポートの認知が高いことを示す。なお、サポーターが存在しない場合でも回答できるようにサポーターの存在の有無について問う欄を設け、存在しない場合は、4項目をそれぞれ1と回答する。SSPS-Pはサポートの種類別の得点、サポーター別の得点、トータルサポートスコア（全項目を合計した得点）を算出できる。本研究では、各項目別の素点、下位尺度であるサポートの種類別の項目平均得点（サポートの種類別に合計した得点をサポーターの数で割った値）、トータルサポートスコアとその項目平均得点（全項目を合計した得点をその項目数で割った値）を統計解析に供した。

なお、7種類のサポーター以外に支えになるひとを自由に記載し、回答選択肢の4項目に回答する欄を設けてあるが、これは得点化に影響しない。

3. SSPS-Pの項目分析と妥当性の検討

SSPS-Pの項目分析とソーシャルサポートスケールとの併存妥当性を検討するために、コンビニエンスサンプルとして1保育所に調査を依頼し、保育所内で倫理的配慮などを検討してもらい研究協力への同意を得た。そして、ここに通所しているこどもをもつ父母を対象とした。家族数でみると、128家族であった。

調査方法は留め置き法とし、保育士を通して質問紙一式（調査への依頼状、SSPS-P・ソーシャルサポートスケール・回答者の基本属性を把握するために作成した自記式質問紙を1組の冊子としてまとめたもの〈父親用と母親用の2冊〉、薄謝、返信用封筒）を対象者に配布、自宅で記入した後、回収し

た。

ソーシャルサポートスケール¹⁰⁾¹⁹⁾は丸らによって開発された24項目からなる自記式質問紙であり、「夫」（6項目）、「両親・親戚」（6項目）、「友人」（6項目）、「近所のひと」（6項目）から支援されると感じる程度を測定する。ソーシャルサポートの内容は、「私のことを助けてくれます」は手段的サポート、「私のことを認めてくれます」は尊敬、「悲しいこと、腹が立つこと、さみしいこと、こわいことなどを話します」は情緒的サポートであることが示されているほか、構成概念が明示されていない「私のことをわかってくれます」「私のことを大切に思っています」「困ったことを打ち明けます」の合計6項目から構成されている。SSPS-Pとの対応を2名の家族看護学・小児看護学の研究者で検討したところ、尊敬は評価的サポート、構成概念が明示されていない3項目は情緒的サポートに該当すると考えられた。回答は「まったく違う」を1点とし、「まったくそのとおりに」を5点とした5段階のリッカート・スケールで、得点が高いほどソーシャルサポートの認知が高いことを示す。

対象者には、本研究の趣旨と内容、研究への参加・協力は個人の自由意思に基づくものであり、研究に参加しない場合や、参加の同意が得られた後に同意を撤回したり、回答を拒否した場合でも不利益を受けることは一切ないこと、希望により詳細な資料を見ることが可能であること、匿名性及び安全性が保障されることを明記した調査への依頼状を対象者に配布し、参加の意思のある場合のみ質問紙に回答、返却してもらった。質問紙一式は配布用の封筒に入れて、2007年7月17日に配布し、同年7月26日までに回収した。

4. SSPS-Pの信頼性の検討

内部整合信頼性（内的一貫性）、反復信頼性を検討するために、コンビニエンスサンプルとして2保育所に調査を依頼し、保育所内で倫理的配慮などを検討してもらい研究協力への同意を得た。そして、ここに通所しているこどもをもつ父母を対象とし

た。家族数で見ると、C保育所は104家族、D保育所は70家族であり、合計174家族であった。

調査方法は留め置き法とし、保育士を通して質問紙一式（調査への依頼状、1回目の質問紙一式はSSPS-P・回答者の基本属性を把握するために作成した自記式質問紙を1組の冊子としてまとめたもの〈父親用と母親用の2冊〉、薄謝、返信用封筒、2回目の質問紙一式はSSPS-P〈父親用と母親用の2冊〉、薄謝、返信用封筒）を対象者に配布、自宅で記入した後、回収した。対象者には本研究の趣旨と内容、研究への参加・協力は個人の自由意思に基づくものであり、研究に参加しない場合や、参加の同意が得られた後に同意を撤回したり、回答を拒否した場合でも不利益を受けることは一切ないこと、希望により詳細な資料を見ることが可能であること、匿名性及び安全性が保障されることを依頼状を通じて説明し、参加の意思のある場合のみ質問紙を回答・返却してもらった。質問紙一式は配布用の封筒に入れて、2009年1月14日に配布し、1回目の質問紙を同年1月21日までに、2回目の質問紙を同年2月4日までに回収した。

5. データの集計と解析

データの集計および解析は、Windowsパソコン上の統計解析ソフトウェアSPSS 18.0（エス・ピー・エス・エス株式会社）、JMP 7.0.1（SAS Institute Japan株式会社）を使用した。

SSPS-Pの信頼性を高めるために、SSPS-Pとソーシャルサポートスケールの両方を回答したひとを対象として、トータルサポートスコアと各項目の平均得点の上下0.5 SDで回答者を上位群・中位群・下位群に区分し、上位群と下位群の平均得点をWilcoxonの順位和検定により比較する上位-下位分析（Good-Poor Analysis）を行い、各項目を検討した。

併存妥当性は、SSPS-Pとソーシャルサポートスケールの両方を回答したひとを対象として、SSPS-Pの「配偶者」「身内（配偶者は含まない）」「友人・知人」「近所のひと」それぞれの情緒的サポート、手段的サポート、評価的サポートの各項目の素

点の平均得点とソーシャルサポートスケールの「夫・妻」「両親・親戚」「友人」「近所のひと」それぞれの情緒的サポート、手段的サポート、評価的サポートの各項目の素点の平均得点の相関によりソーシャルサポートスケールとの併存妥当性を検討した。相関の強さにはSpearmanの順位相関係数（rs）を用い、その有意性を表すp値を算出した。

内部整合信頼性は、反復信頼性の調査において、1回目と2回目の両方の質問紙を回答したひとを対象として、Cronbachの α 係数により検討した。

反復信頼性は、1回目と2回目の両方の質問紙を回答したひとを対象として、トータルサポートスコアの項目平均得点の相関、各下位尺度の項目平均得点の相関により検討した。相関の強さにはSpearmanの順位相関係数（rs）を用い、その有意性を表すp値を算出した。

III. 結 果

1. SSPS-Pの項目分析と妥当性の検討

1) SSPS-Pの回収状況と回答者の属性

54家族99名（父親45名、母親54名）から回答があり、家族数でみた回収率は42.2%であった。有効回答が得られた52家族89名の属性は表2にまとめた。

2) 得点の分布と上位-下位分析

28項目の平均得点は表3にまとめた。「配偶者」の「情緒的サポート」と「手段的サポート」の平均（±標準偏差）はいずれも3.9（±1.3）と高く、天井効果が認められた。「近所のひと」と「医療関係者」の「手段的サポート」の平均（±標準偏差）はいずれも1.9（±1.0）と最も低かったが、床効果は認められなかった。

SSPS-Pのトータルサポートスコアの平均得点は83.10（±15.92）点で、上位群28名（91.06点以上）と下位群26名（75.14点以下）では、トータルサポートスコアの平均得点に有意差が認められた（ $p=0.000$ ）。同様に各項目の平均得点で3群に区分

表2. 回答者の属性

項目		妥当性の検討 (N = 89)			信頼性の検討 (N = 112)		
		人数 (%)			人数 (%)		
性別	男性	38 (42.7)			51 (45.5)		
	女性	51 (57.3)			61 (54.5)		
学歴	大学卒業未満	77 (88.5)			91 (81.3)		
	大学卒業以上	10 (11.5)			21 (18.8)		
職業の有無	無職	10 (11.5)			5 (4.5)		
	有職	77 (88.5)			107 (95.5)		
家族形態	核家族	72 (83.7)			93 (86.1)		
	拡大家族	14 (16.3)			15 (13.9)		
		平均	標準偏差	範囲	平均	標準偏差	範囲
年齢		32.6	5.1	20~46	34.0	4.4	25~42
同居家族の人数		4.3	0.9	2~7	4.2	0.9	2~6

各項目の2群間に有意差なし (Wilcoxonの順位和検定またはPearsonの χ^2 検定)

表3. 未就学児のいる親用ソーシャルサポート認知スケール (SSPS-P) の項目別の得点 (N = 89)

項目	平均 (±標準偏差)			
	情緒的サポート	手段的サポート	情動的サポート	評価的サポート
1. 配偶者	3.9 (±1.3)	3.9 (±1.3)	3.5 (±1.3)	3.6 (±1.3)
2. 身内	3.9 (±1.0)	4.0 (±1.0)	3.8 (±0.9)	3.7 (±1.0)
3. 友人・知人	3.6 (±0.9)	2.6 (±1.0)	3.4 (±0.9)	3.3 (±0.8)
4. 近所のひと	2.3 (±1.1)	1.9 (±1.0)	2.4 (±1.2)	2.2 (±1.0)
5. 仕事仲間	3.1 (±1.3)	2.2 (±1.2)	3.1 (±1.3)	2.9 (±1.2)
6. 保育士・教員	2.8 (±0.9)	2.4 (±1.2)	3.0 (±1.1)	2.5 (±0.9)
7. 医療関係者	2.3 (±1.0)	1.9 (±1.0)	2.7 (±1.1)	2.2 (±1.0)

表4. 未就学児のいる親用ソーシャルサポート認知スケール (SSPS-P) とソーシャルサポートスケールの対応する項目間の相関係数 (N = 89)

項目	Spearmanの順位相関係数 (rs)		
	情緒的サポート	手段的サポート	評価的サポート
1. 配偶者	0.78**	0.62**	0.65**
2. 身内	0.54**	0.54**	0.58**
3. 友人・知人	0.45**	0.41**	0.50**
4. 近所のひと	0.62**	0.43**	0.47**

**p<0.01

した後、上位群と下位群の平均得点を比較した結果、全28項目で有意差が認められた (p=0.000).

3) SSPS-Pの併存妥当性の検討

SSPS-Pとソーシャルサポートスケールの対応する項目間の相関係数は表4にまとめた。SSPS-Pとソーシャルサポートスケールの対応する項目間において、Spearmanの順位相関係数は0.41以上で、有意な相関が確認できた。

4) 回答所要時間

SSPS-Pを回答するのに要した時間について尋ねたところ (有効回答65名)、1分から30分の範囲に

あり、その平均 (±標準偏差) は6.57 (±4.93) 分であった。

2. SSPS-Pの信頼性の検討

1) SSPS-Pの回収状況と回答者の属性

101家族182名 (父親81名, 母親101名) から回答があり、家族数でみた回収率は58.0%であった。有効回答が得られ、1回目と2回目の両方の質問紙に回答した61家族112名の属性は表2にまとめた。なお、妥当性の検討における有効回答者と信頼性の検討における有効回答者の各属性について比較したところ、統計学的に有意な差は認められなかった。

表5. 未就学児のいる親用ソーシャルサポート認知スケール (SSPS-P) のCronbachの α 係数 (N = 112)

項目	Cronbachの α 係数
全28項目	0.91
各下位尺度 (各7項目)	
情緒的サポート	0.74
手段的サポート	0.71
情動的サポート	0.70
評価的サポート	0.70

表6. 2週間の間隔をおいた未就学児のいる親用ソーシャルサポート認知スケール (SSPS-P) の相関係数 (N = 112)

項目	Spearmanの順位相関係数 (rs)
全28項目	0.77**
各下位尺度 (各7項目)	
情緒的サポート	0.66**
手段的サポート	0.75**
情動的サポート	0.66**
評価的サポート	0.74**

** $p < 0.01$

2) SSPS-Pの内部整合信頼性の検討

1回目と2回目の両方の質問紙に回答した112名を対象に、全28項目、各下位尺度ごと (各7項目ごと) のCronbachの α 係数は表5にまとめた。Cronbachの α 係数は、いずれも0.70以上であった。

3) SSPS-Pの反復信頼性の検討

1回目と2回目の両方の質問紙に回答した112名を対象に、2週間の間隔をおいたSSPS-Pの相関係数は表6にまとめた。全28項目のSpearmanの順位相関係数は0.77であったが、下位尺度を確認したところ、情緒的サポートと情動的サポートは、いずれもSpearmanの順位相関係数が0.66であり、0.70を下回る結果であった。

IV. 考 察

1. 就学前の子どもを養育している親のサポート源について

SSPS-Pは、多様化した現代家族のサポート源を質問紙調査により確認し、既存の尺度より拡大して網羅的にした。現代家族のサポーターを調査した結果、「配偶者」「身内 (配偶者は含まない)」「友人・知人」「近所のひと」「仕事仲間」「保育士・教員」「医

療関係者」の7カテゴリーと分類が不可能かつ極少数意見である「その他」(元夫、恋人、芸能人などが記載されていた)が抽出された。

丸ら¹⁰⁾は、就学前の子どもを養育している母親のソーシャルサポートスケールを作成する際、母親の重要他者として「夫」「両親・親戚」「友人」「近所のひと」をあげている。乳幼児健診に来所中の母親を対象に調査を実施した結果、夫のサポートが最も高く、友人、両親・親戚と次いで、近所のひとのサポートが最も低かったことを明らかにしている。荒牧²⁰⁾は、就学前の子どもを養育している母親のソーシャルサポートスケールを作成する際、「夫」「妻方の親」「母親の兄弟」「母親の姉妹」「友人」「幼稚園の先生」「保育所の先生」の7種類のサポーターを設定している。首都圏在住の就学前の子どもを養育している母親を対象に調査を実施した結果、ふたり親家族では夫からのサポートが、ひとり親家族ではきょうだいからのサポートが重要であったことを明らかにしている。SSPS-Pは、これらの調査で示された、就学前の子どもを養育している家族のサポーターを網羅している。さらに、サポーターの項目精選の際に、「あなたにとって支えになるひと」を20人まで自由に列挙してもらったなかで、極少数意見が多数あったため、サポーターに関する自由記載欄を設けた。すなわち、固定した7種類のサポーター以外のひとが重要なサポーターである可能性があるため、SSPS-Pでは、有力なサポート源を見逃さないよう、より幅広く、網羅的にサポーターを把握できるよう工夫を凝らした。この回答は得点化に影響しないが、家族支援を行う際には活用できよう。

2. SSPS-Pの項目分析と妥当性について

SSPS-Pの得点分布を見ると配偶者の情緒的サポートと手段的サポートにおいては天井効果が認められ、高い得点方向に偏りがみられた。これは、就学前の子どもを養育している母親は夫からのサポート得点が最も高いという研究結果¹⁰⁾²⁰⁾と一致する。床効果は認められなかったが、近所のひとの手段的

サポートの得点が低かった。これは丸ら¹⁰⁾の調査結果と一致しており、近隣との関係が希薄であることが影響したものと考えられる。医療関係者の手段的サポートの得点も低い、地域で生活している健康なひとを対象としたことから、医療関係者からの手段的サポートを必要としない可能性が考えられる。本研究では、手段的サポートを「家事・育児を手伝ってくれる、お金や物を貸してくれるなどの実際的な手助け」と操作的に定義したことも、これらのひとからの認知が低い要因となった可能性が考えられる。

上位-下位分析では、全項目において上位群と下位群の得点に有意差が認められたため、SSPS-Pの各項目は弁別力が高いことが証明できた。すなわち、SSPS-Pは、適切な項目から構成されていると考えられた。

SSPS-Pの併存妥当性を検討した結果、SSPS-Pとソーシャルサポートスケールの対応する項目間において、Spearmanの順位相関係数0.41以上の比較的強い相関があり、併存妥当性が確認できた。ただし、対応する項目は「配偶者」「身内（配偶者は含まない）」「友人・知人」「近所のひと」における「情緒的サポート」「手段的サポート」「評価的サポート」であり、SSPS-Pに相当する網羅的な既存の尺度がないため全ての項目について併存妥当性は検討できなかった。この他の項目における併存妥当性の検討は今後の課題である。

3. SSPS-Pの信頼性について

全28項目と各下位尺度のCronbachの α 係数を算出したところ、0.70以上²¹⁾の値を示し、尺度の内部整合信頼性は確保できたと考えられる。ただし、全28項目のCronbachの α 係数が0.91と高い一方で、各下位尺度のCronbachの α 係数はやや低く、その値に開きがある。下位尺度の信頼性がやや低いことはSSPS-Pの課題であろう。Cronbachの α 係数は、その計算式の性質から、項目数が多くなるほど値が大きくなることより²²⁾、SSPS-Pの下位尺度は項目数が少ないために値が低くなった可能性が一因とし

て考えられる。

2週間の間隔をおいて行った再テスト法においては、Spearmanの順位相関係数が0.70以上²¹⁾の値を示し、尺度の反復信頼性が確保できたと考えられる。ただし、下位尺度について検討したところ、情緒的サポートと情動的サポートは、Spearmanの順位相関係数が0.60以上の有意な相関が認められたものの、0.70を下回る結果であった。反復信頼性の係数は0.70を上回れば条件を満たしていると判断されるが、測定法の安定性とは無関係に時間とともに変化する特性のものもあるため、低くても承認される場合があることが示されている²¹⁾。実際的な手助けである手段的サポートや自己評価に関連する評価的サポートの認知は比較的安定しているが、個人の感情と関連がある情緒的サポートや必要な情報が得られるという情動的サポートの認知は2回のテストの間の経験によって左右される可能性が考えられる。情緒的サポート、情動的サポートともに、「保育士・教員」「医療関係者」の2回のテストの間の相関係数が低いためにサポート全体の相関係数が低い結果であった。これらのサポーターはほかのサポーターと比較して濃厚には接触しないことが推測され、2回のテストの間の接触の有無や程度に結果が左右された可能性も考えられる。これらのサポートの安定性については今後の課題である。

4. SSPS-Pの適応について

SSPS-Pは、誰から、どのような種類のサポートを、どの程度受けることが可能かという個人の認知を短時間で簡便に評価できる尺度である。現代家族のサポーターを調査し、SSPS-Pを作成したが、これは既存のソーシャルサポートスケールにおけるサポーターを包含していた。また、Houseの定義する4種類のサポートに対する認知を測定できる。サポーター別の得点、サポートの種類別の得点、トータルサポートスコアを算出することで、ソーシャルサポートをさまざまな側面からアセスメントすることが可能となる。回答に要する時間を調査したところ、SSPS-Pの回答所要時間は平均6分であり、比

較的短時間で回答できるため、多忙な家族支援の実践現場においても簡便に利用できよう。今後、SSPS-Pを使用して、出産などにより新たな家族員を迎えた家族、入院中の病児をもつ家族、慢性疾患や障がい児をもつ家族など、社会資源の活用が必要と考えられるさまざまな家族を対象としたインターベンションや小児看護学、家族看護学研究への活用が期待される。

V. 本研究の限界

SSPS-Pには、7種類のサポーター以外に支えになるひとを自由に記載し、回答選択肢の4項目に回答する欄を設けたが、7種類以外のサポーターを記載した回答者が極めて少なく、この欄の欠損が多いため、得点化せずに統計解析から除外した。しかし、7種類以外のサポーターが有力なサポート源となる可能性を考慮すると、得点化の方法について、さらなる検討が必要であろう。妥当性の検討における回収率は42.2%、信頼性の検討における回収率は58.0%と比較的高い回収率が得られたが、限られた対象に対する調査の実施に留まった。今後は、ほかのサンプルを得て調査を拡大することが望まれる。丸らのソーシャルサポートスケールとの併存妥当性を検討したが、SSPS-Pは既存の尺度にはない項目を網羅した尺度であり、すべての項目の併存妥当性は検討できなかった。併存妥当性を確認していない項目に対する検討は今後の課題である。

VI. 結論

就学前のこどもを養育している親のソーシャルサポートを評価するためにSSPS-Pを開発した。表面的妥当性を確認した後、保育所にこどもを通所させている父母を対象として、併存妥当性、内部整合信頼性、反復信頼性を検討した。SSPS-Pは信頼性と妥当性があり、平均6分と比較的短時間で回答できる尺度であることが明らかとなった。今後、就学前

のこどもを養育している親のソーシャルサポートを簡便に定量的に測定する尺度としてSSPS-Pが活用され、このような家族の育児支援に寄与することを期待したい。

謝 辞

貴重な時間を費やし、調査にご協力くださいました対象者の皆様と保育所の先生方に深謝いたします。

(受付 '12.08.10)
(採用 '13.03.03)

文 献

- Hiratani, Y., Hohashi, N.: Family functions of child-rearing single-parent families in Japan: A comparison between single-parent families and pair-matched two-parent families, *Japanese Journal of Research in Family Nursing*, 16(2): 56-70, 2010
- 片山理恵, 内藤直子: 乳幼児を持つ母親, 父親の家族機能と子育て支援, *日本女性心身医学会雑誌*, 15(3): 294-304, 2011
- 片田範子: 小児看護とソーシャル・サポート・ネットワーク, *看護研究*, 20(3): 20-25, 1987
- 吉永茂美, 岸本長代: 乳児を持つ母親の育児ストレス, ソーシャル・サポートとストレス反応との関連—初産婦と経産婦の比較から—, *小児保健研究*, 66(6): 767-772, 2007
- 海老原亜矢, 秦野悦子: 保育園・幼稚園児を育てる母親の育児負担感—ストレス・コーピング, ソーシャル・サポートの関係—, *小児保健研究*, 6(63): 660-666, 2004
- 白川園子, 園部真美, 齊藤早香枝: 育児におけるソーシャルサポートの役割, *小児看護*, 29(12): 1700-1705, 2006
- 藤生君江, 中野照代, 荒木田美香子, 他: 幼児を持つ母親の就業状況別家族機能とソーシャルサポート, *聖隷クリストファー大学看護学部紀要*, 11: 85-99, 2003
- 荒木美幸, 大石和代, 岩木宏子, 他: 育児期にある母親に対するソーシャルサポートの実態, *長崎大学医療技術短期大学部紀要*, 13: 127-132, 1999
- 式守晴子: 家族像の多様化に伴う看護基礎教育における家族看護学の到達目標の検討を, *家族看護学研究*, 18(1): 1, 2012
- 丸光恵, 兼松百合子, 奈良間美保, 他: 乳幼児期の子どもをもつ母親へのソーシャルサポートの特徴, *小児保健研究*, 60(6): 787-794, 2001
- 堤明純, 堤要, 折口秀樹, 他: 地域住民を対象とした認知的社会的支援尺度の開発, *日本公衆衛生雑誌*, 41: 965-974, 1994

- 12) 堤明純, 萱場一則, 石川鎮清, 他: Jichi Medical School ソーシャルサポートスケール (JMS-SSS)—改訂と妥当性・信頼性の検討—, 日本公衆衛生雑誌, 47(10): 866-878, 2000
- 13) 宗像恒次, 仲尾唯治, 藤田和夫, 他: 都市住民のストレスと精神健康度, 精神衛生研究, 32: 47-68, 1986
- 14) Antonucci, T. C., Israel, B. A.: Veridicality of social support, a comparison of principal and network members' responses, *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 54(4): 432-437, 1986
- 15) Whethington, E., Kessler, R. C.: Perceived support, received support, and adjustment to stressful life events, *Journal of Health Social Behavior*, 27: 78-89, 1986
- 16) 法橋尚宏, 山下知美: 家族システムユニットの成長・発達, 法橋尚宏編集, 新しい家族看護学: 理論・実践・研究, 26-33, メヂカルフレンド社, 東京, 2010
- 17) House, J. S.: Work Stress and Social Support, Addison-Wesley, Massachusetts, 1981
- 18) Holloway, I., Wheeler, S.著, 野口美和子監訳: 真実性と質を確保すること, ナースのための質的研究入門, 246-261, 医学書院, 東京, 2008
- 19) 兼松百合子, 荒木暁子, 奈良間美保, 他: PSIとソーシャルサポート, PSI育児ストレスインデックス手引き, 59-72, 雇用問題研究所, 東京, 2006
- 20) 荒牧美佐子: 育児への否定的・肯定的感情とソーシャル・サポートとの関連—ひとり親・ふたり親の比較から—, 小児保健研究, 64(6): 737-744, 2005
- 21) Denise, F. P., Cheryl, T. B.: Assessing data quality, *Nursing research: Principles and methods*, seventh edition: 413-447, Lippincott Williams & Wilkins, Philadelphia, 2004
- 22) 石井秀宗: 尺度を作る研究で必要なこと, 統計分析のここが知りたい—保健・看護・心理・教育系研究のまとめ方—, 78-90, 文光堂, 東京, 2005

Development of a Social Support Perception Scale for Parents Rearing Preschoolers (SSPS-P) and Evaluation of Its Effectiveness

Yuko Hiratani¹⁾ Naohiro Hohashi¹⁾

1) Division of Family Health Care Nursing, Kobe University Graduate School of Health Sciences
(Certified Nurse Specialist [CNS] in Family Health Nursing Program)

Key words: Social support, SSPS-P, Instrument development, Child-rearing support, Family support

Although social support plays an important role in child rearing, few scales have yet to be developed for assessment of social support for today's increasingly diversified families. The aim of this study was to develop a Social Support Perception Scale for Parents Rearing Preschoolers (SSPS-P) and to evaluate its effectiveness.

Items were selected through parents' responses, and the SSPS-P was constructed. It is structured as a self-administered questionnaire composed of four subscales and 28 items, with face validity confirmed by four researchers. When the SSPS-P was administered to parents, significant differences were observed between good and poor groups for all 28 items in the good-poor analysis. The correlation coefficient of the corresponding items between SSPS-P and social support scale by Maru et al. was above 0.41, thereby supporting concurrent validity. Cronbach's alpha coefficient was 0.91, showing a high internal consistency reliability. Spearman's correlation coefficient was 0.77 during a 2-week interval, indicating test-retest reliability.

From these findings it was determined that the SSPS-P is a reliable and valid instrument for assessment of social support for parents rearing preschoolers. SSPS-P can be expected to contribute to further research and intervention for child-rearing families.